

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

- 28 下村登良男 1981「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会
- 29 和田晴吾 1984「石川県国分尼塚1・2号墳」『月刊文化財』254
- 30 都出比呂志 1983「長法寺南原古墳」大阪大学南原古墳調査団
- 31 川崎公敏・近藤義行 1987「芝ヶ原古墳」城陽市教育委員会
- 32 北野耕平 1967「富田林市板持古墳群調査概報」富田林市教育委員会
- 33 置田雅昭 1974「大和の前方後方墳」『考古学雑誌』59巻4号 日本考古学会
- 34 山田良三 1981「109号墳」『新沢千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
- 35 1989年3月12日付「毎日新聞」「読売新聞」等各誌
- 36 鳥取県埋蔵文化財センター 1988「特集 会見町普段寺1号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取埋蔵文ニュース』No.19
- 37 松本岩雄 1983「寺床1号墳関連資料一覧」『松江考古』第5号 松江考古学談話会
- 38 山本清 1963「松本古墳調査報告」島根県教育委員会
- 39 島根県教育委員会 1987「出雲岡田山古墳」
- 40 松本岩雄 1983「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」Ⅱ 島根県教育委員会
- 41 三宅博士・松本岩雄 1982「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」Ⅰ 島根県教育委員会
- 42 鎌木義昌・近藤義郎 1968「備前車塚」『考古学研究』14巻4号 考古学研究会
- 43 近藤義郎 1986「備前車塚古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 44 近藤義郎・高井健司編 1987「七つ坑古墳群」七つ坑古墳群発掘調査団
- 45 神原英朗 1975「用木古墳群」山陽団地埋蔵文化財調査事務所
- 46 河本清・柳瀬昭彦 1979「久米三成4号墳」岡山県教育委員会
- 47 鎌木義昌 1964「岡山の古墳」日本文教出版株式会社 なお『岡山県史』では「郷観音山古墳」（全長43m，前方後円墳）との記載である。
- 48 近藤義郎 1986「橋原寺山古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 49 森浩一編 1971「同志社大学文学部考古学調査報告第3冊 丹田古墳調査報告」同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
- 50 八木武弘 1986「雉之尾1・2・3号墳」『愛媛県史 資料編』考古 愛媛県
- 51 沢田康夫 1981「妙法寺古墳群」那珂川町教育委員会

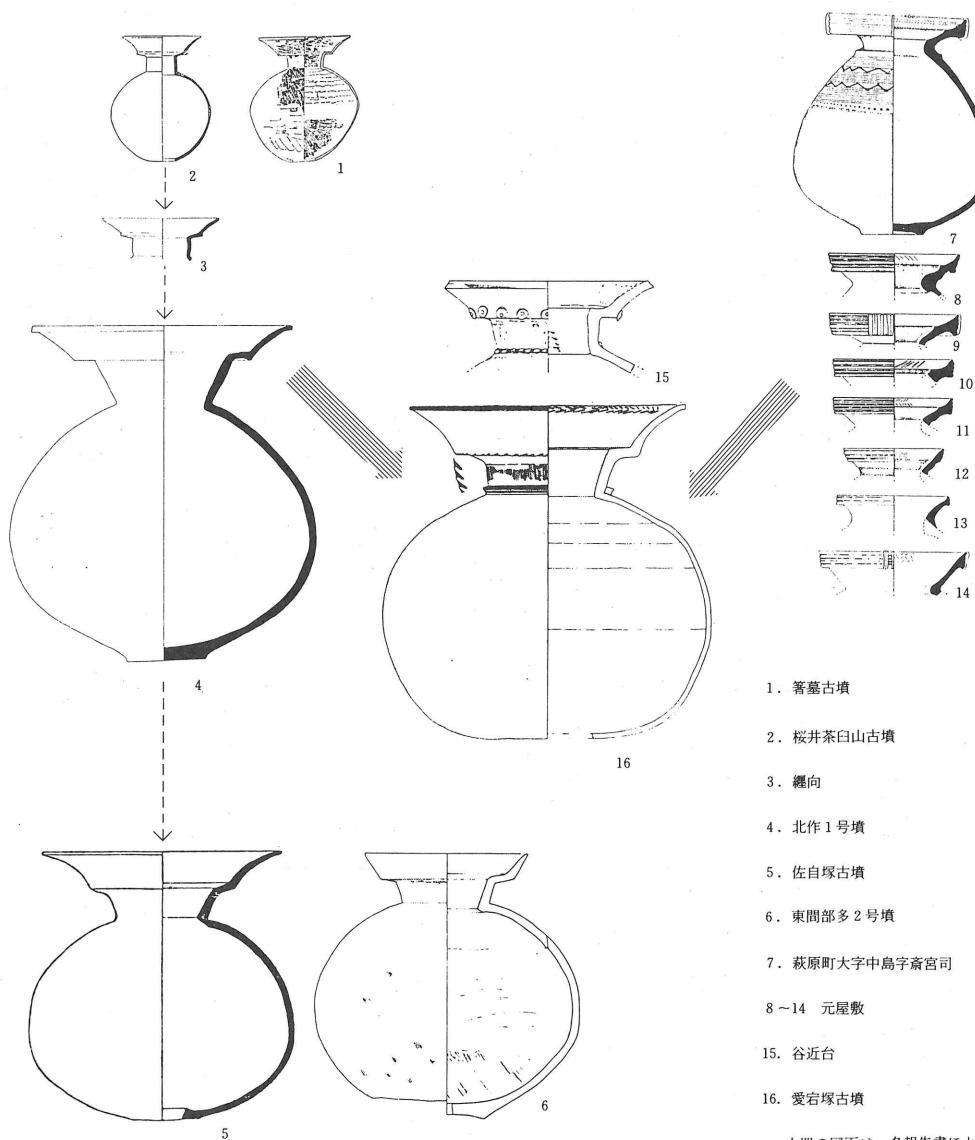
4 土師器の系譜

愛宕塚古墳から出土した土器類は、墳裾、墳頂より転落した状態、周湊内に安置された状態で確認された。そこで、東側周湊くびれ部（G-B4）から出土した2個の壺（有段口辺壺と広口口辺壺で、同形同大の広口口辺壺は西側くびれ部からも出土している。）について、土師器の系譜を中心に編年的な位置付けについて検討する。

(1) 有段口辺壺形土器（第40図）

この土器は外反する口辺部を持つ壺である。筒状の頸部から段をもって広がりさらにそこから口辺部上面に綾杉の櫛目刺突文を巡らし、段部下縁にも櫛目の圧痕が施こされている。頸部には粘土紐をめぐらし斜めに櫛目文が施されあたかも綱を思わせる施文の土器である。有段口辺の壺は、桜井茶臼山古墳・箸墓古墳ほか、常陸狐塚古墳・佐自塚古墳・前橋天神山古墳・朝倉Ⅱ号墳・

北作1号墳・東間部多2号墳・神門3号墳など供物用土器として古墳に供えられる他に、住居跡からも確認されることは今さら論じるまでもなく、その系譜についてもそれぞれの地域の既存形態から生みだされたものとする考え方や、畿内第五様式あるいは東海西部地域の弥生終末期の土器群に求められるものと考えられてきた。現在、大和盆地東南部にある纏向遺跡の調査では、桜井茶臼山古墳出土壺形埴輪の祖形と思われる有段口辺の萌芽がすでに纏向1式後半期に認められることが判明^{註1}し、また近年の寺沢薫氏の論考でも、いわゆる「茶臼山形」有段口辺壺の出現が庄内3式にみられるが、大形化の兆候はすでに庄内0式(纏向1式併行)のなかで醸成されているとい^{註2}う。反面、関東地方における有段口辺壺の出現は弥生時代までは遡り得ず、当地方における初期



第121図 二段口辺壺形土器の系譜

古墳の築造時期と相前後する時期であることが確認されており、大和地方に後出することは明らかである。有段口辺の底部穿孔壺は、古墳祭祀に深く関係した土器であり、作りのよく似た形状が九州地方から東北地方まで広く分布している。古墳祭祀とそれに係る祭祀用土器(小型丸底埴・小型器台・底部穿孔有段口辺壺)が大和の勢力のもとにつくられたものとするれば、愛宕塚古墳出土例も大和地方の強い影響を抜きにしては考えられないであろう。

墳丘上に樹立された壺形土器は、胴部、頸部、口辺部の変化によって細分化されるが、現状では箸墓古墳出土例^{註3}が最も古く、桜井茶臼山古墳出土例^{註4}がこれに次ぐ時期のものであろう。両者は口辺部の段の作りに若干の違いが認められるものの、きわめて類似した形態を示し、纏向3式～4式(庄内晩葉～布留早葉)に位置付けられている。纏向4式(布留1式併行)以降、九州から東北南部までが真の古墳時代を迎え、東国にも初期古墳が造営されることとなるが、有段口辺壺を出土した古墳を関東地方に求めると、北作1号墳例^{註5}、第121図-4は二点出土した内の一点で明確な有段口辺をなしている。口辺部は大きく広く外反し、口辺部下端の稜には刻目が見られる。下膨らみで刷毛目が残されている。壺形土器6点の他に、埴形4点、高坏3点、器台形3点が出土している。

東間部多2号墳例^{註6}、第121図-6は西側くびれ部周溝から出土している。胴部球形で、口辺の外反の度合もなだらかなり、短く直立気味に立ち上がっている。段の幅も北作1号墳例より短くなっている。

諏訪山29号墳例^{註7}、口辺部は頸部からほぼ水平に開いた後に外反気味に大きく開き、頸部には突帯がめぐっている。口辺部に比べて胴部が小さいが、口辺部の形状は愛宕塚古墳出土例に酷似している。この土器は後方部周溝のテラス面から出土している。

佐自塚古墳例^{註8}、第121図-5は口辺部が大きく外反し、北作1号墳出土例に近似するが、頸部が短く、口辺部のフラットな段を明瞭に残さなくなる。佐自塚古墳は全長8.4mの長大な粘土槨を有し、墳頂下から器台、高坏、小形埴が出土している。

常陸狐塚古墳からは、頸部から段をもって外反する口辺部、能満寺古墳からも同様の壺口辺部が、いずれも細片で確認されている。他にも原1号墳、勅使塚古墳などに見られるが、これらはむしろ南関東・後期弥生式土器からの系譜と思われる幅広複合口辺土器に近似している。この種の有段貼付け手法は久ヶ原・弥生町・前野町期に主流を占める、幅広の粘土紐を一部重ね合わせ、上方へ貼り付けることによって幅広の口縁面を表現する口辺部に祖形をもとめられよう。

愛宕塚古墳出土の有段口辺壺は、朝顔形円筒埴輪の起源との関連で論じられた桜井茶臼山古墳出土の壺(器高35.3cm)や箸墓古墳出土の壺(器高45.2cm)に口辺部の形状が類似し、庄内期以降のこれらの土器群からの系譜が想定できる。そして、東国の古墳祭祀に使われたこの種の壺は、その形態からみると愛宕塚古墳・北作1号墳・諏訪山29号墳・常陸狐塚古墳出土例(布留中段階)は東間部多2号墳・佐自塚古墳(布留新段階)の前代に置かれるものであろう。しかしながら、愛宕塚古墳出土例のように有段口辺の内面に綾杉文を巡らす例は、畿内はじめ東国でも類例の少ない

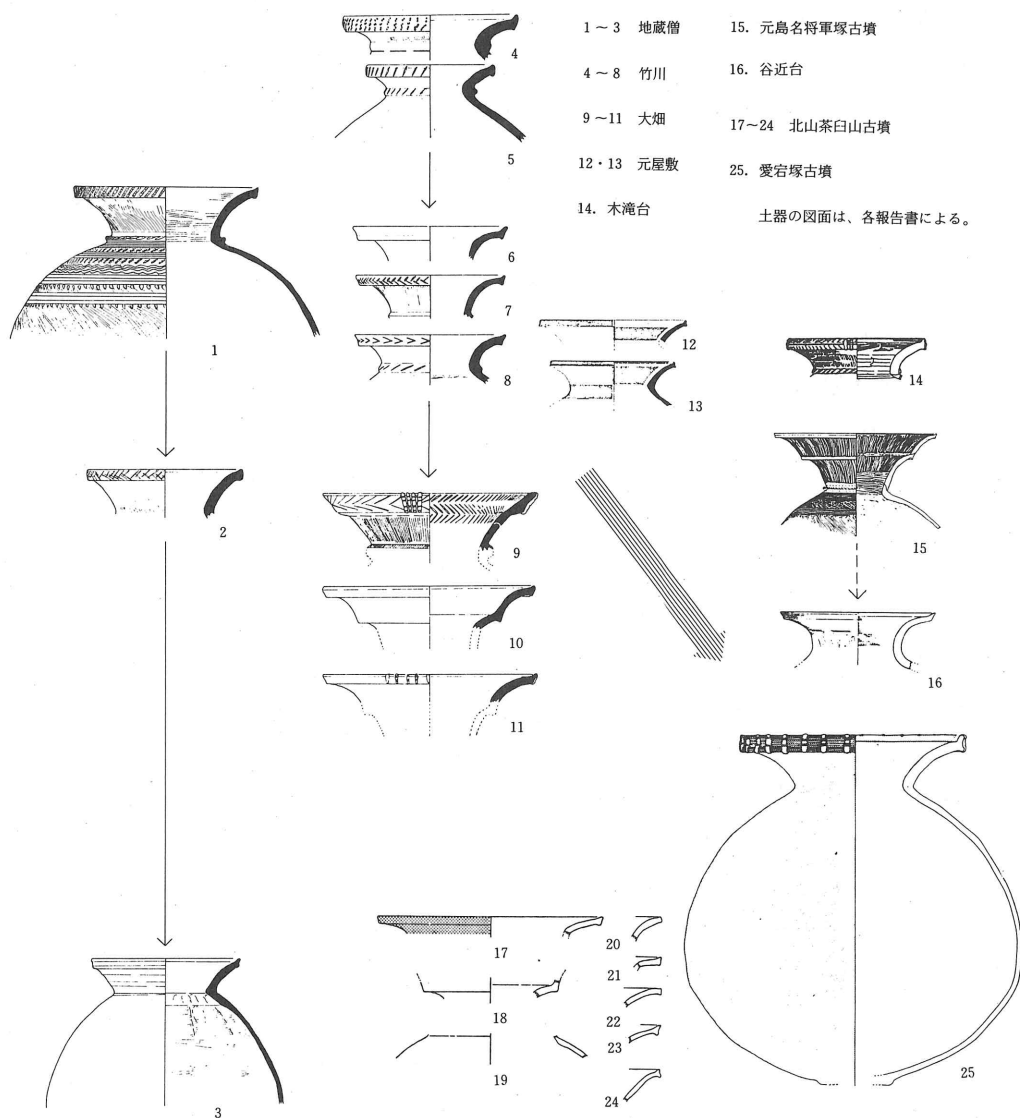
特異な土器であり、直接畿内地方に系譜を求めるわけにはいかない。口辺内面にヘラ描き（あるいは櫛刺突）綾杉文を巡らす作法は、弥生後期後半の一宮市下渡遺跡・南木戸遺跡・元屋敷遺跡をはじめとして、古く尾張地方の弥生後期前半（山中期）から認められるところである。濃尾型壺（パレススタイルを言う）の文様は、口辺部内面および胴部上半に施紋されるのを原則としている。口辺部内面については、櫛・篋状工具の刺突、押圧による綾杉文を基調とする豊富な文様構成をとっている。

一宮市萩原町大字中島字斎宮司出土例^{註9}（第121図－7）は欠山新相の濃尾型壺で、口辺内面に櫛目の羽状文を施し、胴部上半に直線文と山形文を巡らしている。元屋敷遺跡出土例（第121図－8～14）も櫛目あるいはヘラ描きの羽状文が施されている。一方、鳥羽市大畑遺跡出土^{註10}の広口壺（第122図－9）でも、口辺部内外面に櫛目刺突による列点文を羽状に2～4段施している資料が知られている。愛宕塚古墳例にみられる綾杉文は、これらの文様とは微細な点で異なっているが、尾張～伊勢中北部の壺に施された文様の系譜内にあることは考えられよう。これら濃尾型壺の器面を飾った文様が、器形こそ変われ、有段口辺壺の口辺部にみられたことは、当時の活発な社会状況を反映したものともみることができ、少なくとも一地域の土器系譜からだけでは捉えられないことを示している。

(2) 広口口辺壺形土器（第40図）

この土器は口辺部がくの字状に大きく外反し、口縁は幅広の带状でその上下は若干出張っている。带状口縁には細い粘土紐をタテに貼付し、その紐をタテに三分するように櫛目が二本、交差するようにつけられている。貼付文系の飾りが、弥生式土器の伝統を受け継いだ土師器の口辺部の文様として残されたものであることは明らかであり、また、口辺部を幅広くする広口壺の作法は東海地方とりわけ伊勢湾地方の後期弥生式土器に見られることから、貼付文系の装飾と同様に当地方との関連性が問題視されている。濃尾型壺について、欠山期（東牧式）には胴部器形は下ぶくれの無花果形が一般的となり、口辺端部を上下にのばして幅広の带状口縁とし、ほとんどの場合、細線貼付文が施される。胴部文様は平行線と鋸歯状沈線文を重ねるように定形化する。ところが次の元屋敷期には、口辺形態は単純化し、口辺端部を下方へ引きのばして带状口縁をつくる作法は簡略化され、胴上半部の文様も粗くなる傾向が看取できるという^{註12}。濃尾型壺は、浅井和宏氏による最近の研究によって分類・編年が深まり、口縁部もその形態によって細分化されている。濃尾型壺の带状口縁には確かに、垂直なもの（浅井第Ⅱ類a）と上端外傾するもの（第Ⅱ類b）とがみられ、第Ⅱ類bについても、口縁面に擬凹線文が施されたもの（第Ⅱ類b₁）と施されないものとがある。しかし、愛宕塚古墳出土例と比較してみた場合、そこにはかなりの空隙が感じられ、口辺部を幅広くみせる作法は、濃尾型壺よりむしろ伊勢地方の単口辺広口壺に近いと考えることができる。濃尾型壺に対応するものに伊勢地方の単口辺広口壺が存在するという指摘があり、三重県竹川遺跡などに良好な資料が多い。伊勢・尾張地方の類例をみてみよう。

地蔵僧遺跡例^{註14}、第122図－1・2・3は報文において広口壺Aと分類されたもので、1の带状



第122図 広口口辺壺形土器の系譜

口縁には櫛目刺突文を施す。頸部には突帯が巡り、体部も櫛描横線・刺突文・波状文で飾られている。2は1と同様に口辺部をわずかにつまみ上げて帯状口縁を作り、面にヘラ刻みを施している。3も帯状口縁を同様な作法によるが、装飾を省いている。1・2・3は時期的にそれぞれ、弥生時代後期・古墳時代前期前半・同前期後半に位置付けられている。

竹川遺跡例^{註15}、第122図－4～8例は遺跡破壊後の調査であったために、遺物と層位の関係は明瞭にできなかったが、その形状により弥生時代後期中葉(4・5)と同後期末葉に分けられている。特に後者の口辺部は折り返し状の複合口辺となるもので、櫛状工具により羽状に刺突文が施され

ている。これは第122図-1に口辺部形態は類似するが、文様も鑑みると(4・5)→(1)→(6・7・8)へと伊勢地方の流れを捉えることができる。また、田口一郎氏は元島名將軍塚古墳出土の二重口辺壺を「伊勢型二重口縁壺」と呼び、その祖形を、竹川遺跡などの弥生後期末の広口壺に認めている。^{註16}

大畑遺跡例、第122図-9・10・11例は古墳時代前期に位置付けられるものである。9は「柳ヶ坪」型土器の名称で知られたもので、内外面に櫛状工具による刺突文を羽状に施している。11と同様に細線貼付文があり、さらに貼付文上を櫛目により押圧している点など、愛宕塚古墳出土例に共通した文様として考えることができる。

元屋敷遺跡例、^{註9}第122図-12・13は広口壺B類に分類されたもので、口辺部の形態・文様がA類の濃尾型壺に比して単純化した類を指して分けられている。本例は土師器として認められる土器群であり、綾杉文様などは施されていない。類似資料が群馬県北山茶臼山古墳から出土している。また、この種の帯状口縁の面に細線貼付文の付けられた土器が大畑遺跡にみられる。

このように、伊勢地方で注目されるのは竹川遺跡などの弥生後期の広口壺であり、これが地蔵僧遺跡では古墳時代前期後半まで一貫した系譜が把握される。伊勢地方の広口壺は、濃尾型壺に比して帯状口縁の発達が弱いようであり、この地方の影響は、尾張地方の元屋敷遺跡から群馬県元島名將軍塚古墳・北山茶臼山古墳、茨城県木滝台遺跡など、広く関東地方にまで及んでいる。一方、広口壺に細線貼付文の付くのは、大畑遺跡例にみられるように古墳時代に入ってから類例が増加している。愛宕塚古墳出土広口壺の帯状口縁細線貼付文も、伊勢の「柳ヶ坪型土器」、濃尾の細線貼付文系の装飾を取り入れたものと推察される。

(3) まとめ

愛宕塚古墳出土の有段口辺壺の形状は、箸墓古墳・桜井茶臼山古墳にみられる庄内式の壺形土器の系譜に属するものであろうことは想像に難くなく、それを基調に口縁・頸部突帯に濃尾型壺の要素を取り入れたものであろう。口辺内面に篋描き(あるいは櫛目)羽状文を巡らす手法は、伊勢中北部並びに尾張地方の弥生後期前半から認められるところであり、これら濃尾型壺の器面を飾った文様が、異系譜の壺の口辺部文様として取り入れられたと考えられよう。一方、広口口辺壺は類例が少なく、その系譜については不明な部分が少なくない。しかし現状では、三重県竹川遺跡、同県地蔵僧遺跡、同県大畑遺跡などにみられる、帯状口縁をつくる広口壺を基調に、「柳ヶ坪型土器」「濃尾型土器」の貼付文系の装飾が取り入れられた形が、本例と推察される。

愛宕塚古墳出土の壺は、在地の弥生式土器の中には系譜をもとめられず、他地域の土器群にその系譜を求めなければならない。しかしその地域を、特定することは困難で、本古墳出土土器には在来の土器作法に複数地域の影響を受けてつくられたものと考えられる。

今後は土器の系譜について、複数地域の故地を求め、それぞれの地域のどのような要素を受容し、在来の土器作法と融合したのか、つまり、在来土器作法に他地域の作法が、何時、何の為に将来されたのか、それら他地域の作法要素を受容することの有利性は那辺に存したのか、それは、

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

単に土器の作法変化としてのみの把握でなく、社会経済史的、政治史的要素とのからみで考察すべきことは論ずるまでもないが、単なる土器の形態、文様の変化、変遷のみに終始するものではなく、その背景の考究を最終目途とするもので、本稿では序説的な記述にとどめるものである。

(注)

- 1 石野博信・関川尚功『纏向』橿原考古学研究所編 1976
- 2 寺沢薫『矢部遺跡』橿原考古学研究所編 1986
- 3 笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』27 1976
- 4 上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』奈良県教育委員会 1977
- 5 滝口宏・金子浩昌ほか『印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化調査（付編）』千葉県教育委員会 1961
- 6 田中新史・須田勉ほか『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団 1974
- 7 坂本和俊「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986
- 8 斉藤忠「佐自塚古墳」『茨城県史料』考古資料編・古墳時代 1974
- 9 澄田正一・大参義一ほか『新編一宮市史』資料編二 1967
- 10 下村登良男ほか『おばたけ遺跡発掘調査報告』鳥羽市教育委員会 1972
- 11 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』 1984
- 12 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』47号 1968
- 13 浅井和宏「“バレス・スタイル壺”小考」『マージナル』No.7, 愛知考古学談話会 1987
- 14 『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市教育委員会 1978
- 15 山田友好・谷本鋭次『竹川遺跡』三重県文化財連盟 1972
- 16 田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981

(参考文献)

- 高橋一夫「関東地方における非在地系土器出土の意義」『草加市史研究』第4号 1985
- 比田井克仁「外来系土器の展開—古墳時代前期の東京を中心として—」『古代』第78・79合併号 1985
- 『古墳出現期の地域性』第5回 三重シンポジウム 1984
- 『欠山式土器とその前後』第3回 東海埋蔵文化財研究会 1986
- 『欠山式土器とその前後 研究・報告編』第3回 東海埋蔵文化財研究会 1987
- 『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会編 1987
- 『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回 埋蔵文化財研究集会 1989